



東日本大震災から 11 年

3月11日、東日本大震災から11年を迎えます。甚大な被害を受けた東北地方では復興が進み、少しずつ日常を取り戻しつつある一方、未だ故郷へ帰ることができない人々が多くいることも事実です。

近年、地震のみならず、台風の大型化や豪雨による土砂災害、豪雪による都市機能の麻痺など、気象災害の激甚化により、私たちの生活・いのちが脅かされています。輸送サービス労組では「災害からのちを守る」ことを活動基調の一つに据え、防災・減災対策の具現化や、ハザードマップの活用、セカンドベスト（次善防災）の考え方を取り入れるなど、災害大国で生きるための覚悟と知識を一人ひとりが身に付けていくことが重要であると考えます。

11年前、私たちの日常を襲った震災をいま一度振り返り、防災に関する自身の身の周りの備えや、いざというときにどう行動すべきなのか、改めて考える機会としていきたいと思います。

福島「今」は…

～JTSU「グリーンジョブ研修福島」に参加して～

東日本大震災から11年たった今も変わらない地域がある。それは富岡町、夜ノ森地区、大熊町など、福島県第1原発、第2原発に近い地域である。2011年3月11日、東日本大震災が発生し避難指示が出され、そして福島原発事故が発生。戻る家、戻る故郷が一瞬にして失われた。被災した方々の苦労は甚大なものであり、今でもその思いは変わらないだろう。



夜ノ森駅前には11年たった今も住民の姿はなく、周辺では窃盗などの対策として警察が巡回をしている。町は地震で崩れた箇所や、新築の家、割れた窓ガラスなどが、現在もあの日のままの姿であった。除染作業が進み、政府は避難地域から解除をしたが、少し道を走ればガイガーカウンターは1ミリシーベルトをカウントし、警報音が鳴り続けている。



福島で作られた電気はほぼ東京で使われていた。そして11年たった今も福島の方々は苦しい思いをしている。二度と起こしてはならない事故を教訓とし、持続可能なエネルギー施策への転換を考えなければならない。(2022年2月)

